私の教育実践　～「仕合せ（しあわせ）」から「幸せ」へ～

愛媛県立しげのぶ特別支援学校　校長　稲荷　邦仁

「仕合せ」には、「巡り合わせ」という意味があります。私は、「中島みゆき」さんの名曲「糸」の、「逢うべき糸に出逢えることを人は<u>仕合せ</u>と呼びます」という歌詞でこの言葉に出逢いました。私の教員生活（37年目）の中で、各職場へ配属されたことは、単なる「仕合せ」だったのかもしれませんが、それが仕事に打ち込む中で「幸せ」に変化していくことをその都度実感してきました。これもひとえにすばらしい先生方、個性豊かな子供たち、そして保護者の皆様との素敵な出会いがあったからこそであると感謝しています。

この機会に自分自身の教員人生を振り返ってみました。

○ 初任校時代（第一養護学校　現しげのぶ特別支援学校）

大学を卒業して肢体不自由特別支援学校（当時は養護学校）に赴任し、痛感したことは「大学時代の勉強が全く役に立たない」でした。私の休日の日課は、本屋で専門書を探し、それを買って読みあさり授業のヒントを得るというものでした。あるとき、授業を参観していた保護者の方から「先生、よく勉強しているね。」という一言が・・・。教師が勉強するのは当たり前なのですが、その頃の私にとっては何よりもうれしい言葉でした。この時期が私の「学び続ける教師」の原点となっています。

○ 聾学校時代（宇和聾学校、松山聾学校）

知識が全くなく赴任した聾学校ですが、子供とコミュニケーションがとれず授業が成立しないことに愕然としました。あるとき、保護者から「学校には期待していないですから。」という厳しい一言が・・・。それから猛勉強が始まり、「言語指導」「発音発語指導」「聴覚活用」「手話」などの専門知識や技能の習得につながりました。また、乳幼児教育相談にも従事し、結果として、「聾教育専門？」と言われるほど専門性を高めることができました。「子供や保護者の願いにこたえたいという気持ちや意欲があれば専門性は後から付いてくる」という持論が培われた時期です。

○ 総合教育センター時代

行政の世界に入り、特殊教育から特別支援教育への大変革（H19）によって、「発達障がい」がクローズアップされた時期でした。特別支援学校しか経験のない私に、通常の学校の先生方に対していかに発達障がい児の抱えている困難さの理解を図るかという命題が突き付けられました。関連の書籍を片っ端から読みニーズに応じた研修資料を作成し講義をするという自転車操業の毎日でした。辛く厳しい日々でしたが、結果として、相手に分かるように話すということのレベルアップにつながりました。また、小・中学校の先生方との勤務経験は、自身の視野を広げる上で大変役立ちました。物事を筋道立てて考える態度が身に付いたのもこの時期です。

○ 管理職として（宇和特別支援学校、みなら特別支援学校、しげのぶ特別支援学校）

宇和特別支援学校で、西日本豪雨という痛ましい災害に遭遇しました。悲しい体験でしたが、日頃から様々なケースを想定してシミュレーションしておくことなどの危機管

理の大切さを痛感し、自己の意識変革を行うことができました。

みなら特別支援学校は、県下随一の職員数を有する大規模校でした。組織をまとめるために「チーム」で取り組むことの大切さの理解に力を尽くしました。「チーム学校」の重要性を強く認識した時期です。

過去を振り返る中で、今の私は教員生活の各ステージでの試練を乗り越えた成長の上に成り立っていること、そしていつも最後には「幸せ」を感じることにつながっていることを改めて認識することができました。

４月からしげのぶ特別支援学校で勤務しています。おそらく最後の勤め先になるであろう学校が、新規採用の学校だったことは「仕合せ」なのかもしれません。しかし、今回も「仕合せ」を「幸せ」に転換できるよう今後も精進してまいりたいと思います。